



**はなまる花園**  
たけだ・みつひこ  
竹田 満彦さん  
(佐方・56歳)

**Profile**  
父の代から花きを営み、兄の龍治さんとともにはなまる花園を経営。以前は胡蝶蘭を栽培していたが、平成になりバラ作りを始める。750坪のハウスで年間15万本を出荷。

## 栽培に適した土地でないからこそ、努力・工夫を続けて今があるんです

バラはとても病気にも弱く、デリケートなため、その栽培にはとても手間が掛かります。

少しの時間強い日差しが当たっただけで、葉が焼けてしまうこともあるので、外部からの遮光に気を遣います。また、雨や風でハウス内の温度が変わるため、その管理は常に気が抜けません。

バラは35~40日程度で採花できますが、たった5分程度気を許したためにその期間がすべて無駄になってしまうのです。

だから、生産農家は365日、24時間、常にバラのことを考えています。

それだけ手が掛かるからこそ、育てたバラには思いが詰まっているのです。

この辺りは山に囲まれ、平地も少なく、あまり農業に適した土地とは言えません。それでも4者合わせて県内1の生産量を誇れるのは、それぞれが時に仲間として、時にライバルとして、勉強・努力・工夫を怠らず、常に新しい技術に関して貪欲に取り組んだ結果だと思っています。

切りバラは、花持ちの良さが品質の証です。買っていただいて、少しでも長く楽しめ、満足してもらえるものをこれからも生産していきます。

## 佐伯地域や吉和地域だけでなく、廿日市地域でも、盛んな農業があることを知ってほしい

バラに限らず、花の持つ力はすごいと思っています。何気なく存在し、あまりにも身近にあるので普段はあまり気付かませんが、人にとって心が和む大きな存在なんです。人に贈ると喜ばれ、たとえ一本でも食卓に飾ると食事の雰囲気がガラッと変わります。それが、本来の花や植物の持つ力だと思います。

バラの管理には非常に気を遣いますが、ロックウール栽培に変えてからは、生産性がぐっと上がりました。栽培する環境を自分で作れるのがいいところですね。全国では8割がこの方法で生産しています。

また、ハウス内には気化熱を利用した冷却装置も取り付け、生産性の向上に努めています。

しかし、それでも病気に弱いバラは、天候や気象条件に振り回されることが多いです。毎年同じ気象条件というものはなく、自然との闘いであり、勉強の繰り返しです。

廿日市市で農業と言えば、佐伯地域や吉和地域を思い浮かべる方も多いと思います。しかし、この上平良では昔から同じバラ科の植物、イチゴの生産が盛んです。廿日市地域でも盛んな農業があることを知ってほしいと思います。



**則貞農園**  
のりさだ・ゆきお  
則貞 幸夫さん  
(上平良・42歳)

**Profile**  
50年以上続く農園を父と一緒に経営。1000坪、8棟のハウスで年間40万本を出荷。現在、広島県花卉（かき）園芸農業組合バラ部会の部会長を務める。佐伯農業者クラブのメンバーでもある。

# 続けていくこと— 産地としての挑戦



バラの市場価格の低迷。ケニア、インド、韓国など海外からの安い輸入バラの増加。燃料高騰によるコストの増加など、バラ生産者を取り巻く環境は厳しい。事実、昭和50年代、広島県には40の切りバラ生産農家が存在したが、現在では15農家に減少した。しかし、廿日市の生産農家は4軒がそのまま存在し、現在も全国でトップクラスの品質を保ち続けている。狭小で平坦な土地が少ない場所でここまで続けてこれたのは、新しい技術をいち早く取り入れたり、工夫する努力を惜しまなかったから。バラ生産にかけるその思いを聞く—。



**原農園**  
はら・やすお  
原 保雄さん  
(原・64歳)

**Profile**  
義父の農園を継ぎ、昭和60年代からバラの栽培を始める。530坪、5棟のハウスで年間10万本を出荷。県内で初めて循環式養液栽培システムを導入し、近代化農業に取り組む。

## 生産地と近いというのは、花持ちに直結します。地元の花を見直すきっかけにしてほしい

洋服などと同じようにバラにも流行があり、花の形や色など数年のサイクルで流行が変わります。

昭和40年代には、大輪でスタンダードなバラが好まれましたが、その後スプレーバラの人気が出て、現在はまた大輪も人気が出ています。

求められるもの、そして品質の良いものを作ることが私たちの使命だと思っています。

農業を営む者なら共通していると思いますが、植物を育てるということはとても楽しいことです。「一日でこれだけ伸びた」と、子どものようにはしゃぐこともあり、その喜びは

何にも代えがたいものです。

生産量を増やそうと平成10年頃に農業改良普及所の指導で循環式養液栽培システムを導入しました。液体の肥料を循環させることで、その費用を抑えることができるだけでなく、収穫も多くなり、良品ができるようになりました。

それも、多くの人との出会いやつながり、そして協力があつたからこそ。そのことに感謝しています。

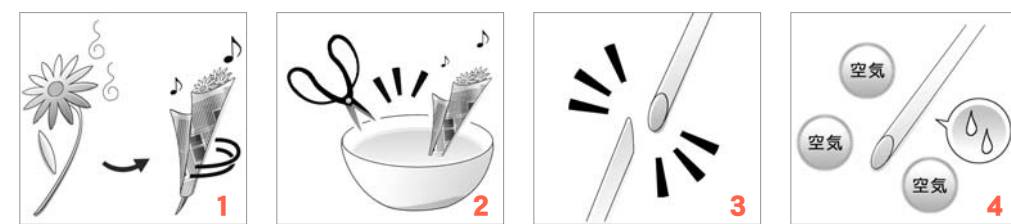
何より、切り花の命は鮮度。生産地と近いということは、買った後の花持ちに直結します。地元の花を見直すきっかけにしてほしいですね。

## バラはこうして育てられています—

**写真\_1・2** ロックウール養液栽培。土を使わず、ロックウール（鉱物に石灰を混ぜ高温で繊維質にしたもの）で苗を栽培する方法。自動的に決められた一定量の養液を送り育てる。 **写真\_3** 循環式養液栽培システム。養液の一部を捨てる「かけ流し」ではなく、循環させることでコストをカットする栽培法。 **写真\_4** 採花の時期を調節し、通年を通じて出荷が可能に。



## 切りバラを長く楽しむために—



**写真\_1** 水をまっすぐに吸い上げさせるため、新聞紙などに巻きます。  
**写真\_2** 水の中で茎を切ります。  
**写真\_3** 水を吸い上げる面積を広くするため斜めにカット。水平に切ると茎の細胞がつぶされる恐れがあります。  
**写真\_4** 水の中で切ることで、細胞の中に空気が入らず、よく水を吸い上げます。また、花瓶の水の中でバクテリアが繁殖すると、導管を詰まらせるので、3日に1度くらい切り口を2cmくらい切り戻します。水に切り花栄養剤を加えると花が長持ちします。